2020/11/15

(うとQ世話し それだけは何としてもご勘弁を)

「本心を語らない人と話をしてもつまらない。仮面をかぶった人と話しても疲れるだけ」
仮面をかぶっているのです、いくらこちらが話しても声が届かないでしょうし、相手の声も聞こえてきません。

手応え無しの空回りで虚しいばかり。

一昔前までは「内弁慶」とか「外面(そとづら)がいい」という言い方もありましたが、今では家庭内ですらこの仮面を脱げない方も増えているようで。

それじゃあ、どこで仮面を脱いでいるのかといえば自室やトイレで一人になった時。

いやいや、それもできなくなって自室にいる時ですら仮面を脱げなくなってしまっている人も。

例えば仮面を脱ぐと目に見えない鏡に自分の本当の姿が映ってしまい、怖くて見られないので自室ですら仮面をかぶり続けているとか。

しかしそれではあまりにも息苦しく、それこそ息つく暇もなくなります。

それでどうするかといえば、仮想空間、ネットの中で「本性を剥き出し」にする。

無論ネットの中でも仮面をかぶっている人もいますが、その人たちはまだそこ迄深刻な「仮面病」になってはいない人。

話を戻します。

その時、本性を剥き出しにする相手は、決まって全くの第三者。

直接の利害関係者には「利害が絡む」ので「ヤバくて」手が出せないのです。

その生贄になる第三者さんこそいい迷惑。

上記が若い人に多い傾向だとすると、ネットの技量が少ない年配者は、電車やバスの中、個人を特定しにくい歩道などで、見も知らぬ第三者に「殆ど反射神経レベルでコマメ且つ小出しに意地悪」を繰り返す。少しずつガス抜きをする。

これはもう日課というより「なくて七癖」位にしっかりと身に染みついてしまっている。

仮面を脱いで、少しでも本心が語れる相手や場所があれば、そんなことをしなくて済むはずなのに。

なんでこうなってしまうのでしょうか？昨今の我が国は。

いやいや、もっと言えば仮面をかぶっていることすらもうすっかり忘れてしまっているような気がしないでもありません。

「えっ、何の話？」

そういわれたら返す言葉もありません。

そうして話す気すらうせてしまいそうです。

そうなることだけは「なんとしても」ご勘弁を。